Interview

地域の子どもを地域で育てる想い

中野市社会福祉協議会
ボランティアコーディネーター
神田（かんだ） 秀一（しゅういち）さん

中野市社会福祉協議会（以降「社協」）では、子どもカフェの活動支援のコーディネートを行っています。中野市で子どもカフェが始まったのはつい最近のこと。

社協単独で「フードバンク事業」や「制服等リサイクル事業」を始めましたが、学校に通う子どもがいる世帯で食事を十分にとれないので支援が欲しいというものはありませんでした。「子どもの貧困」や「子ども食堂」の取り組みがメディアで取り上げられる中、市民の方から子どもカフェを立ち上げたいという相談があり、私たち社協の職員も一緒に子どもカフェについて学びながら、市内でも子どもカフェが始まりました。

実際にカフェに来る参加者は、「家にいても遊び相手がいないから友達と遊ぶために来た」「ママ友たちの交流で来た」などのコミュニティを求めての参加が多いことが分かりました。学習支援で大人が勉強を教えようとすると「なじみのない大人に教えてもらうのは恥ずかしい」とスタッフの想いとのずれを感じることもありました。

子どもカフェといえば「貧困層の方が利用する」というイメージがある方もいると思いますが、「誰もが来られる居場所」と考えていただきたいです。ボランティアにとっても、「何かの役に立ちたい」という想いを置く場所になっています。

子どもカフェを持続していくためには、まだまだ課題があります。現在、ボランティアで中心になって活動している方たちの後継者が必要です。また、1小学校区に1カ所のカフェがあったら良いとも考えています。「場所なら貸せるよ」「自分の子どもも行くからスタッフになってもいいよ」「食材なら提供できるよ」と子どもカフェに興味がある方は、ご相談ください。

子どもカフェは、子どもが地域の中で大人と関われる場所であることがとても良いことであると感じます。家で過ごすだけでなく、大人も子どももみんなで遊んで、みんなでご飯を食べられる場所が子どもカフェです。その場所に慣れてくると、家では話せない悩みや相談を話せるようになってくるかもしれません。大人からも子どもからもいろいろな声を拾うことができます。そうした「居場所」にしたいと奮闘するボランティアの人たちの支援をこれからも続けていきたいです。

地域で子どもを見守る

オレンジリボン運動は、「子ども虐待のない社会の実現」を目指す市民運動。オレンジリボンは、そのシンボルマークで、オレンジ色は子供たちの明るい未来を表しています。10月に開催された信州中野おごっそフェアにおいて「地域で子どもの安全を守るキャンペーン」のブースでオレンジリボンを啓発しました。子どもとの共同作業を通じて、褒めることを最優先とする「親子対話のコツ」を体験してもらいながら、「地域の子どもの安全を守る決意の表れ」としてオレンジリボンを来場者に配布しました。なお、オレンジリボンは中野市役所の子ども相談室で配布しています。

狩猟の時期!!
いままでの訓練の成果を発揮します！

今月の協力隊員　諫山未来雄 隊員
問 農政課 ☎22-2111（内線250）

地域での活動を通じて

中野市に移住してから半年が過ぎ、活動も本格化してきました。9月と10月に僕の母校である武蔵野大学の学生をインターン生として、迎え入れました。これは農業体験を通して中野市を知ってもらいたいと企画しました。梨久保区でぼたんこしょう畑を営む松野さんのお家にお世話になりながら、ぼたんこしょうの収穫や地域の人との交流、先輩協力隊との仕事を体験してもらい中野市の魅力や雰囲気を掴んでもらえたと思います。都会で感じられない日常を五感で感じてもらい、今後の人生の糧にしてもらえればうれしいです。11月からは猟期となり、メインミッションである有害鳥獣対策が始まっています。心身ともにしっかり準備をして、中野市の農作物を守っていこうと思います。

1＿狩猟現場の銃声、飛んでいく鴨、全てが新鮮でありリアル。
2＿インターンに来た臼倉さん。地元グルメを満喫しました。
3＿まちのアトリエ結文舎で海外での経験を語りました。

池田市長の わくわくレポート vol.69

子ども食堂は コミュニティのチカラ

◀わくわく信州なかの100人会議では、「わくわくする場所」を話し合ってもらいました。こうした、場所づくりも大切なことです。

今から5年程前、経済学者のトマ・ピケティの著「21世紀の資本」が日本で刊行された。内容は主に格差を取り上げたものであった。難しい話は置いておいて、要は富や所得の格差が拡大していることに警鐘を鳴らし、課題を提起したものと思っている。

特に子どもの貧困はわが国の将来に向けても大きな克服課題であり、明るく元気な地域を創るためにも積極的に取り組まなければならない。

折しも、2015年国連で採択されたＳＤＧｓは「持続可能な社会」を実現するための枠組みを定め、2030年に向けた17の目標と169のターゲットからから構成されているが、その第一番目に掲げられた目標が、貧困をなくそうであり、二番目が飢餓をなくそうである。

子ども食堂は現代社会において、貧困や家庭の事情で、一人で食事をとらなければならない子供たちに温かな食事や団らんで食べる食事の場を提供することで、心豊かに成長してほしいと思う皆さんの活動の成果である。子どもの貧困が言われて久しいが、子ども食堂の動きが、さらに広がりを見せていくことが、住みやすい地域社会を創る大きな支えでもあり、コミュニティの力でもあるといえよう。

誰もが安心して暮らせる地域づくりは、まさにそこに住む者の協働と創意と工夫によって達成されるものと、改めて思う。